Ⅱ　山口県の底延縄漁法

沖縄地区水産業改良普及員　金城　宏

1. 研　修　先

山口県玉江浦漁業協同組合

〃　越ケ浜漁業協同組合

2. 研修者所属及び氏名

糸満漁協漁業振興会	大城　栄
〃	大嵩博美
〃	鳩間利夫
〃	玉城三郎
〃	金城幸栄

3. 研修年月日

昭和48年10月11日～10月18日（8日間）

4. 内　容

イ　漁業形態

山口県における底延縄漁業は、萩市地区を中心に発展し、特に玉江浦漁協、越ケ浜漁協が代表される。漁船も30～50トン級の大型が多く、漁場は東支那海、黄海へと開発されている。

その漁法も底魚のアマダイ類、キダイ、グチ、フグ等が対象であり、支那海200m等深線を大陸よりに操業が営なまれ透明度の低い砂泥地帯である。したがって漁具は綿糸が使用され1日の使用漁具数も150～200鉢（1鉢300m）で、昭和30年当時より2倍になり漁獲努力量の増大が図られている。稼動日数は漁獲物の処理が氷蔵であることから有効鮮度を保持するため、その日数は平均12日限度のようである。

底延縄の漁具をその構造別に比較すると、おのずから業態の相違は認められるが、しかし、それぞれの地域の差異と特徴は有している。